

まほむかふをのゝみなどのながれ江に猶こぎかねてとまるいせ船

〔倭訓栞伊中編二〕いつてぶね。伊豆手舟と萬葉集にみゆ、注釋に、伊豆出舟の義とす、伊豆國の舟の

事は應神紀に見え、舟の製にていふにや、熊野諸手船といふ事、神代紀に見えたり、されば嚴手船の義、いちはやき船をいふ成べし、一説に、五手船の義、二人を一手といへば、十人こぐ船にて、今十挺立小早といふ是也とぞ、

〔詞林采葉抄七〕五手船

櫓十丁立タル舟ヲ五手舟トハ云、二丁ヲ一手ト云故也、又舟ハ伊豆國ヨリ造始タル故、伊豆出舟ト云トモ申メリ、

〔萬葉集二十〕佐吉母利能保里江己藝豆流伊豆手夫禰可治等流間奈久戀波思氣家牟

右九日○天平勝寶大伴宿禰家持作之、  
保利江己具伊豆手乃船乃可治都久○久恐米於等之婆多知奴美乎波也美加母○中

右三首江邊作之、

〔袖中抄十二〕いつてぶね○中

顯昭云、いつてぶねとは、萬葉集に伊豆手船とかけり、船は伊豆國よりつくりいだしたれば、まかよめるにや、○中

萬葉第廿六○六字恐衍 ほり江こぐ伊豆手の船の、かちつくめ、おとしはたちぬ、みおはやみかも、是は家持が越中國にて詠歌也、あながちにいつの船不可詠と、伊豆船を本體としつればよめるなるべし、都にても便にまたがひて、松浦船つくし船などもよめり、又武藏あぶみなどもよめり、○中

奥義抄云、船こぐものをば、いくてと云也、かたく一人づゝあはせて二人をひととと云